

天使の羽

あこ

「せんせ〜い。これ、読んで。」

本棚から持ってくるのはいつも同じ本。

「ふーちゃんは、本当に天使のご本が好きなのねえ。」

「うん、好き。だ〜いちゅき。」

にじいろ保育園の風子は、絵本を読む先生の声を聞きながら、いつも思う。

おそら 飛びたいな。

お給食たべて、お昼寝して、外遊びをしていると、そろそろお迎えのお時間。

「来たー」

風子は大きく両手を振る。

「わ〜い、わ〜い。お母しゃんら。お母しゃんらー。」

お母さんは、両手をあげてぴよんぴよん跳ねるうさぎの風子のところへ近づくと、

「ただいま。」

ぎゅっと抱きしめた。

お帰りのしたくをしながら、

「きょうのお給食はなんだった？ たくさん食べた？」

お母さんは、おなじことを毎日きくけど、

「ばべた」とか「のこちた」とか「おかわりちた」とか、その日によって、ちゃんと正しく答える。

「きょうも、天使のご本をなんども読んだのよね。」

先生の言葉に、お母さんも

「風子は、本当に天使のご本が好きなのねえ。」

「うん、しゅき」

「お昼寝した？」

「うん、ちた。」

「お友だちと遊んだ？ ケンカしなかった？」

楽しい一日を振り返りながら、風子が乗ったベビーカーは、お母さんに押されてゆっくり家へ向かう。

「ついた、ついた。」

「ねえねえ、お母しゃん。ごあん、なあに？」

お夕飯は暖かいおうどん。食べながら話すのは、もうすぐやってくるクリスマスのこと。

「ふーたん、お空 飛びたいの。サンタしゃん、羽くれないかな。」

「羽？」

「うん。」

「羽か……。」

お母さんは天井を見て、頭の中で考えてから、

「お空を、飛びたいの？」

と、ゆっくり聞いた。

「うん、飛びたいの。」

「お空を飛んで、どこか行きたいところがあるの？」

「ううん。」

首を振る風子の口にうどんがつると吸い込まれる。もぐもぐ。

「あのね、火事になってね、逃げえなかったら、死んじゃうでしょ？」

「逃げ遅れたら？」

「うん。こわいでしょ？」

「そりゃそうだ。」

「あとね。地震でね、地面割えて、おっこるよ。はさまってしんだら、いやらよ。」

お母さんは真剣な顔で聞いている。

「ふんふん。それで、空を飛んで逃げるつもりなのね。それはなかなか、いい考えかも。」

ふたりは、うどんのおつゆを飲み干した。

ひとつの布団にくっついて入ると、お母さんは必ず寝る前に絵本を一冊読む。残念ながら今日は天使の本ではありません。

「今度、保育園で天使の本を借りてこようね。」

お母さんが本を閉じる。

「うん。あのね、ふーたんね、飛ぶ練習、ちてんの。」

「飛ぶ 練習？」

「うん、ちてんの。」

「へえー、知らなかった。楽しそう。それは、どんな練習？」

お母さんは風子に話すとき、ゆっくりていねいに話す。

「がんばって、ぴよんぴよんちてんの。高いところからジャンプも。」

「そうなの。けがをしないように気をつけてくださいよ。」

「うん、だいじょうぶ」

風子の肩が隠れるように、ふとんをかけなおして、

「飛べるように、なると、いいね。」

「羽あえば 飛べんだけどなあ。」

「そうね。まあ、今日はもう寝なさい。」

お友だちの陸くんは、毎朝お父さんと手をつないで保育園にやってくる。お迎えの時は、お母さん。

「先生、おはようございまーす。」

お父さんの手を放し、先生めがけて突進。

「陸くんおはよう。今日も元気だね。」

「うん！」

「それにしても陸くんは、お父さんそっくりねえ。」

陸くんとお父さんを見くらべて、先生はしみじみ思った。

「らって、パパの子供だもん。」

陸くんは自慢気。

風子には、お父さんがいないから、よくわからない。

「ふーたんは？ ふーたん、お父しゃん そっくり？」

「えーと、」

困っている先生の横からベテラン先生が入ってきた。

「ふーちゃんは美人のお母さんにそっくりよ。」

その日の帰り、お迎えにきたお母さんを見て、ぴよんぴよん跳ねながら、

「わ〜い、わ〜い。お父しゃんら、お父しゃんらー。」

と言ってみた。お母さんは笑いながら

「お父さんじゃないでしょ、お母さんでしょ。」

と帰りのしたくを始めた。

「きょうのお給食はなんだったの？ たくさん食べた？」

「うん」

北風ぴゅーぴゅーの道をベビーカーが進む。

「ねえねえ、お父しゃんって、なあに？」

「お父さん？お父さんっていうのは、お父さんっていうのは...えーと、そうだなあ。」

お母さんは歩くのをやめて、しばらく空を見ながら考えた。

そして、

「男だよ。」

と、答えた。

「男か。」

「そう。」

「うち、男いないねえ。」

「そうね、いないよね。」

「じゃ、お父しゃんいないのか。」

「うん、そうよ。」

お母さんはまた歩き出した。

「風子はね、お空から降ってきたの。」

「ほんと？ほんと？」

驚く風子を見て、お母さんは笑顔でうなずいた。

「じゃ、ふーたん、天使？」

「そうかも。お母さんも、風子は天使みたいって思うんだ。」

「だから、天使のご本好きなのかな。」

「そうね。風にゆられて、空から落ちてきたから風子ちゃんよ。」

そんな話を聞いていたら、風子の背中がムズムズ。
家につくころには、背中がかゆくて、がまんできずにボリボリかいた。
「どうしたの、風子。かゆいの？」
「うん、かいい。」
「乾燥しているからねえ。あした、病院に行こうか。」

朝になっても背中がかゆくて、病院に寄ってから保育園に行くことにした。
「どれどれ？ 背中ですか。」
先生は、まっしろい頭のおじいさん。
「ふむふむ。アトピーかな。ご家族でアトピーの人は？」
「この子のお父さんが、たしかアトピーで。」
<お父さん？ ふーちゃんのお父さん？ アトピー？ >
「なるほど。そんじゃ、体質がお父さんに似ているのかな。」
先生とお母さんの話を、風子は黙って聞いていた。
<ふーちゃん、お父さんに似てるって>
「いやなところが似るのねえ。」
「はは。いいところも悪いところもですよ。お薬を出しておきますから、毎日塗ってくださいね。」
<アトピーって、なんだろう>
「このチューブは保湿。こっちのクリームはかゆみ止めね。」
お母さんがお薬の説明を聞いている間に、風子は考えていた。
<アトピーって、もしかして。 天使のことかな。 そうだ、天使のお名前ら。 ふーたんのお父しゃん、天使なんだ。 >

風子は保育園につくとすぐに本棚まですっとなでって天使の絵本を開いた。
<ふーたんのお父しゃんら。 ふーたんも 羽 でてくるんだ。 羽 でてくるから、かいいんら>
「わーい、わーい」
そのとき、風子の目の前に、まっしろい羽毛がひとつ。ふわふわ。
「あ、ふーちゃんの羽！」
あわてて羽毛を追いかけた。
<みんなに見つかったら たいへん>
ようやくつかんで、そっと開くと、てのひらにやわらかい羽毛ひとつ。
ダウンジャケットをフックに掛けているおともだちのとなりで、風子のはてのひらを そーっと重ねて頼ずりした。